

2:8 また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。『初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。 2:9 「わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。——しかしあなたは実際は富んでいる——またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。 2:10 あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。 2:11 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。』』

導入

7つの教会に宛てた手紙の中でもっとも短いのがこの手紙です。そこには、この教会に対する称賛のみが記されており、イエスからの批判や課題はありません。

スミルナは、非常に美しい町でした。関西では、京都で教育を受け、大阪で働き、神戸に住むのが理想的だと言われるそうです。

神戸はとても美しい町だからでしょう。私も4年間住んだことがありますし、今でも神戸に出かけるのが好きです。

スミルナも神戸のように、山と海に囲まれたすてきな港町で、豊かな商業都市でした。

この町は、ローマ帝国およびローマの町に対する根強い支持があった場所です。女神ローマを祀る神殿をいち早く建てたのもスミルナでした。

スミルナのクリスチャンが抱えていた大きな問題は、迫害でした。

信仰に忠実なクリスチャンであれば、町の人たちといっしょに女神ローマをはじめとする数々の女神を拝むことはできません。ですから、この町のクリスチャンは迫害に苦しむのが日常でした。

迫害についての記録でもっともよく知られたものは、紀元155年2月23日土曜日の出来事です。スミルナの教会の司教であったポリカルポが殉教しました。イエスに信仰をおいていたことを理由に殺されたのです。この事件について教会史に残された記録がありますので、ここで読みます。皆さんの励みになればと願います。

この事件があった当時、町では公共の競技が行われていました。

現代のオリンピックに似た競技です。あらゆる競技が大きな競技場で行われていました。

そこで誰かが、クリスチャンを殺そうと叫びました。次々に群衆がこの声に賛同し、ついにはキリスト教の教会の指導者であったポリカルポを役人が見つけて捕えました。

競技場に連行される途上、役人はポリカルポに死刑を免れるチャンスを与えます。それは、「カエサルこそ主」と宣言し、ローマ皇帝にいけにえをささげれば、命を救うというものでした。

しかし、ポリカルポは彼にとっての主はイエス・キリストだけであると断固主張しつづけました。彼が競技場に入ると、「ポリカルポよ、強くあれ」という声が天から聞こえました。

そして、ポリカルポに最後の選択が迫られました。群衆の前でイエス・キリストの名を汚してカエサルにいけにえをささげるか、死ぬかのどちらかです。

彼はこう言いました。

「私は86年間イエスにお仕えして参りましたが、主はただの一度たりとも、私に対して不正をなさいませんでした。私を救ってくださった王なるお方を冒瀆することなどできません。」

町の役人から火あぶりの刑に処すと脅されても、こう答えました。「あなたがたは、燃えてもすぐに消えてしまう火で私を脅そうとしています。それは、あなたがたが悪い者を裁く火と永遠の罰を知らないからでしょう。ぐずぐずせず、しようとしていることを早くしなさい。」

そしてポリカルポは祈りました。群衆が彼を焼き殺そうとすると、火は、まるで人々から彼を守るように彼の周りに火の輪となって燃え始めました。信じられない光景だったでしょう。その後、ポリカルポを剣で刺し殺すよう死刑執行人が命じられました。殉教したポリカルポに人々は大きな違いを感じました。

その違いとは、神が彼とともにおられたことです。ポリカルポは死にましたが、神は恵みと力を豊かに与えてくださいました。

ポリカルポは今、パラダイスで体の復活を待っています。そして、私たちも主イエスを自らの救い主として受け入れ、このお方を愛するなら、いつの日かポリカルポに会えるでしょう。

スミルナはクリスチャンにとって住みにくい町でしたが、そこにあった教会は信仰に満ちていました。

では、みことばから神が今日私たちに教えてくださることを見出していきましょう。

この箇所は解釈する上で4つに分けることができます。

ひとつめから見ていきましょう。

試練のもとにあるスミルナ

この手紙から、スミルナの教会が3つの試練に遭っていたことがわかります。

1. 苦しみ — ここで使われているギリシャ語の単語は、もともと重圧に押しつぶされることを意味します。スミルナの教会が感じていた重圧は多大でした。当時、クリスチャンが経験していたことを想像することはなかなかできませんが、肉体的にも精神的にも深い傷を負っていたことはわかります。
2. 貧しさ — 新約聖書では、貧しさとキリスト教は隣り合わせと言えます。パウロは、コリントのクリスチャンのことを貧しくても多くの人を富ませていると表現しました。（コリント第二 6：10）
ヤコブは、神がこの世の貧しい人々を選んで信仰に富む者となさると言いました。（ヤコブ 2：5）
ギリシャ語の単語の意味から、スミルナのクリスチャンが極貧状態であったことがわかります。
彼らは何も持っていませんでした。ただ神の恵みによって奇跡が起こり、生きていくのに必要なものが備えられたのです。
西洋諸国の人で、まったく何もない状態を経験したことがある人はほとんどいません。誰か助けてくれる人が必ずいます。
この教会では、クリスチャン全員が何も持っていない状態でした。
ですから、神は未信者をとおして彼らの必要とするものを与えなければならなかったでしょう。もしその未信者の人たちがそうしてくれなければ、神は全能の御手から直接、荒野でマナを民に与えたようにして与えなければならなかったと思います。
当時の誰かが、「神はどのようにしてスミルナの教会の必要を満たされたか」という本を書いていたら、とても興味深い内容だったでしょう。
3. 投獄 — ヨハネは10日間の投獄を預言しました。
聖書学者たちによると、10日間というのは短期間を指す表現だったようです。当時のこの町において、クリスチャンであることは違法でした。けれども、ほとんどの期間、法律はきっちり守られていませんでした。迫害は突然の荒波のようにやってきました。
イエスは教会の信徒たちに迫害が一時的なものであることを知らせて励まそうとしておられたようです。
つらい状況に置かれた人を励まそうとするなら、その苦しみが永遠に続くわけではないことを知らせてあげると慰められます。

今どんな苦しみや悩みを抱えていても、クリスチャンである私たちにとって、それは永遠に続くことはありません。
天国で過ごす永遠に比べれば、この地上での苦しみは一時的なものです。

スミルナ — 試練の原因

クリスチャンにこれほど多くの問題を引き起こした原因は何でしょう。

残念ながら、これを引き起こしていた張本人はユダヤ人でした。

9節で彼らは、「サタンの会衆」と呼ばれています。

後ほど、この表現について説明します。

使徒の働きの中でも、役人たちとクリスチャンの説教者との間をひっかきまわしたのはユダヤ人でした。

使徒の働きで初代教会が働きを始めたころに多くの場所でそのようなことが起こりました。

使徒 14:2 しかし、信じようとしないうダヤ人たちは、異邦人たちをそそのかして、兄弟たちに対し悪意を抱かせた。

使徒 14:19 ところが、アンテオケとイコニオムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。

使徒 17 : 5-8

17:5 ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして捜した。17:6 しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱって行き、大声でこう言った。「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。17:7 それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行いをしているのです。」17:8 こうして、それを聞いた群衆と町の役人たちとを不安に陥れた。

アンテオケでの話から、役人たちにクリスチャンへの敵意を抱かせることにユダヤ人が成功していたことがわかります。

使徒 13 : 50-52

13:50 ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出した。13:51 ふたりは、彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオムへ行った。13:52 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

2000 年も経った今でも、サタンは同じ作戦を使っています。

サタンは人々の思いに働きかけ、クリスチャンに対する悪意を抱かせて、役所などにクリスチャンのことでクレームをつけるように仕向けます。

では、なぜサタンの会衆という表現が出たのでしょうか。

ヨハネは、ユダヤ人の好む表現を裏返して使ったのです。

ユダヤ人は自分たちが集うときに、「主の会衆」や「主の集会」と呼んでいました。（民数記 16 : 3、20 : 4、31 : 16）

ヨハネは、「あなたたちは自分のことを神の集会と呼ぶけれど、実際には悪魔の集会だ」と言っているわけです。

これは、「宗教心のある」人たちに対する痛烈な批判でした。

神は「宗教」を憎まれます。それは、律法的な生き方が神の恵みに取って代わる人間の考えだからです。

「神の恵み」を他のものとするに替えようとすると、それがどれほど誠実な行為に見えたとしても、神はそれを憎まれます。

そのような試みは、神のご品性への対抗です。イエスが天の栄光を離れてこの世に来てくださったのは、神と神ご自身の被造物である人間との関係を修復するためでした。恵みを他のものとするに替えることは、この事実にも対抗することです。

スミルナ — キリストの主張と呼びかけ

8-9 節で、イエス・キリストがご自身について語られ、この教会に対して、そして私たちに対してあることを呼びかけられます。

- a) イエス・キリストは、初めであり終わりである方です。旧約聖書でこの呼称は神を指します。イザヤ書 44 : 6 を見てみましょう。

イザヤ 44:6 イスラエルの王である【主】、これを贖う方、万軍の【主】はこう仰せられる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はない。

この呼び名にはふたつの側面があります。

クリスチャンにとっては大きな励ましであり、自分の栄光を求めるノンクリスチャンにとっては、彼らのプライドを傷つけるものです。

あなたが今クリスチャンなら、あなたの人生にどんなことが起こっても、よみがえりの主イエスがこの世の人生の最初の日から最後の日まで、そしてそれ以降もずっとともにいてくださると、イエスは言ってくださいます。

ですから、恐れることはありません。

イエスはこの世をお造りになり、いつの日かこの世に終わりをもたらされます。

あなたがまだ母親の胎内にいるときからイエスはあなたを知っておられ、天国に行くその日まで見届けてくださいます。

スミルナの未信者にとって、これは警告でした。

彼らは自分たちの町を愛し、誇りに思っていました。そして、人の手で作り上げる栄光を追い求めていました。この世の物を握りしめ、ずっとこの地上に生きることを願っていました。

イエス・キリストはいつの日か、彼らを裁かれます。彼らは永遠に生きることはありません。

イエス・キリストだけが、賛美と礼拝と栄光をお受けになるべきお方です。

イエスを崇めない人は、他の何かを崇めることになります。けれども、イエスは初めであり終わりであるお方です。他のものは偶像でもそれ以外のものでもいつの日か滅びます。

- b) イエス・キリストが次に主張なさったことは、死んでまた生きたお方であるということです。

これは、イエスの復活を指しています。

イエスは、「わたしは、あなたの苦しみを知っている」とおっしゃいました。

イエスは、スミルナの教会が受けていた仕打ちも経験なさいました。

イエスは、十字架上で苦しみながら死なれました。ですから、苦しみについてよくご存じです。

イエス・キリストは、あらゆる苦しみを経験なさったお方なので、苦しむ私たちを助けることができになります。

イエスは十字架上で苦しまれ、神の御怒りがこのお方に注がれましたが、死と苦しみに打ち勝たれ、天における勝利のいのちを勝ち取られました。

悪魔がどんな手をしかけてきても、起こり得る最悪の事態は、私たちが天国に行つてイエスとともにいられるようになるというわけです。

- c) 最後に、この個所にはイエスからの呼びかけが記されています。それは、死という代償を払っても忠実であるように、というものでした。
「もし人生のすべてをはかりにかけたとしても、忠実はそのすべてに勝る」と言った人がいます。

今日私たちの課題は、「イエスに対して、また自分の属する教会、つまり私たちの場合は大阪インターナショナルチャーチの働きに対して、私たちは忠実であるだろうか」というものです。

忠実であることには、時間やお金の犠牲や仕える責任が伴います。

私たちのために死んでくださり、私たちを死と地獄の呪縛から解放してくださったお方に、常に忠実でありたいものです。

スミルナ — 約束された報い

イエス・キリストは、誰にも借りはありません。しかし、このお方に忠実であれば、報いがもたらされます。

この個所では、ふたつの報いについて記されています。

ひとつめは、「いのちの冠」です。

「冠」と訳されるギリシャ語の単語はふたつあります。

ひとつめは「ダイアデム」です。これは、王冠を意味します。

王が頭にかぶるタイプの冠です。

もうひとつは、「ステファノス」で、「喜び」や「勝利」と関連しています。

クリスチャンに与えられる冠は、王冠ではなく、喜びや勝利の冠です。

ふたつめの報いは「第二の死によってそこなわれることはない」という約束です。

「第二の死」という表現は、新約聖書の他の書では使われていません。

黙示録の他の個所には登場します。（20：、20：14、21：8）

黙示録 20：14 によると、第二の死とは「火の池」に投げ込まれることです。

いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれると語ります。

人は誰でもいつか死にます。未来のある日、すべての人はイエス・キリストの裁きを受けるために死からよみがえります。

イエスを信じる信徒は、永遠のいのちを受け、信徒でない人は、第二の死を受けとり、火の池で永遠に罰せられます。

スミルナの信徒は第二の死によってそこなわれることはない、とイエスは断言しておられます。

彼らは、罪の罰から救われるのです。

当時の人々は、死と同時にその人の存在が消えると信じていました。良くも悪くも死後の世界は存在しないと考えていました。

現在もそのように信じる人もいます。

では、今日のみことばから、日本での生活と OIC における私たちの信仰生活にあてはめて実践できる教えは何でしょう。

1. クリスチャンが迫害で苦しむことは、神からご覧になって、マイナスの経験ではない。
日本はキリスト教国ではありません。イエスの弟子として生きようとするあなたに、嫌がらせをしてくる人もいるかもしれません。
神の証人として歩む私たちの一步一步を神は大切にしてください。信仰のことで、家族や友人から拒絶されたりひどい扱いを受けたりすれば、聖霊が力を与えて助けてくださいます。

2. この世の悪の力が究極の力ではない。

悪魔は常に神のみこころに逆らいます。クリスチャンとの戦いで悪魔が優勢のように思えるときもあります。

しかし、悪魔の力には限界があります。

とは言え、クリスチャンが信仰のために迫害され、殺されるのは悲しいことです。

私たちの実生活でこれをどのように理解すればよいのでしょうか。

私たちクリスチャンは、この世の人生を直視する必要があります。

この世は天国ではありませんから、良いクリスチャンに悪いことが起こることもあります。

クリスチャン人生は常に楽しいものだと期待してはいけません。

クリスチャンになるのは、神戸からクルーズ船に乗って日本の島々を船旅するのは違います。

サタンやその手下と戦うために戦艦に乗り込むようなものです。

私たちの人生における悲しみや苦難はゴルフボールのようなものです。

最初に作られたゴルフボールは、でこぼこのないなめらかな表面でした。

けれども後に、ボールに傷がついたりへこんだりすると、遠くまで飛ぶことがわかりました。

それで、たくさんの小さなくぼみをつけたゴルフボールが作られるようになりました。

これは、クリスチャン人生にも当てはまります。

人生で経験する困難は、私たちをイエスの近くへと引き寄せ、恵みや本物のクリスチャンとして生きることに对我们的私たちの理解を深めてくれます。

私がこれまでクリスチャン人生で味わったつらい体験をお話することはいくらでもできますが、それは皆さんのためにならないでしょう。ですが、神はそのような経験をういて、私の信仰を成長させてくださったとお伝えするのは、皆さんの役に立つはずです。そのような経験なしには、私はもっと貧弱なクリスチャンだったと思います。

軽井沢で開かれる宣教師向けのカンファレンスの講師として、アメリカからやってきた説教者がいました。一週間の会議を経て、主催者はこの説教者にこう伝えました。「はるばるお越しく下さりありがとうございます。けれども、先生が何らかの苦しみを通られるまでは、講師としてお呼びしないことになりました。」

アメリカから来たこの説教者は、宣教師に良いメッセージを届けようと張り切って準備していたので、この決定にずいぶん腹を立てました。

その後アメリカに帰国した説教者は、いくつかの困難に見舞われ、たいへん苦勞しました。彼はこの経験を経て神のみそばに近づき、軽井沢の主催者の言葉に隠された真理をようやく理解したのです。

ヤコブ 1 : 2-4

1:2 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。

1:3 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。

1:4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。

今から、迫害される教会のためにも祈ります。